

# わがまちの紙のルーツ

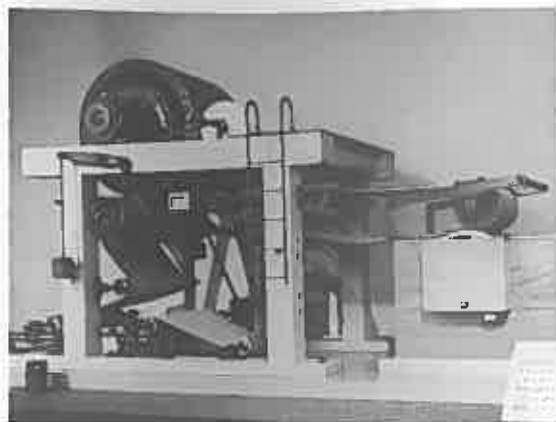
その二：明治初期

昭和五十六年四月五日号

今から千八百七十四年前、中国の蔡倫は木の皮や麻、ぼろきれを原料に世界で初めて紙を作りました。日本に紙の作り方が伝わったのは、今から千三百六十年前の推古天皇の時代、韓国の曇徴によってと日本書記に書かれています。このように紙の歴史は大変古いのですが、わがまちの紙の歴史は比較的新しく、明治になってから始まりました。今回は、なぜ明治時代からこの地に製紙産業が始まり、発達してきたかを調べてみました。

## 製紙発達の出発点

明治四年、宿駅制度が廃止され、同時に宿



原田製紙の第1号抄紙機の模型

馬や人足の都合をつける村々の助郷制度もなくなつてしまいました。

この助郷勤めの日銭が宿場のまわりのお百姓さんの唯一の現金収入の道でしたから、この制度の廃止はお百姓の生活を苦しいものになりました。何かほかに入収入になるものを見つけ出そうといろいろな試みの事業がはじまりました。このようなことを難しいことばで殖産興業といえます。

わがまちの紙の発達史の出発点は、殖産興業の一つであつた内田平四郎さんによる内山でのみつまたの栽培からなのです。みつまたは、戦国時代からの伝統のある駿河半紙の原料で、富士山麓に自生していたので種も手に入りやすく、栽培がすすめられたのです。

その後、みつまたは今泉・原田・吉永・須津

などで大栽培されるようになり、わがまちの和紙工業の発達をうながすようになりました。

## 初めての製紙工場

明治十二年、伝法の栢森貞助さんは和田川べりに富士市で初めて鉤玄社という手すき和紙の工場をつくりました。より白い紙を作ろうと、当時は輸入品で高価だつた苛生ソーダや硫酸を石灰の代わりに晒薬として使ひ良い紙を作つたのですが、採算がとれず鉤玄社はつぶれてしまいました。

しかし、鉤玄社が残した功績は大きく、画期的な晒薬の使用は薬製半紙製造法の基礎になり、大量のみつまたの使用は、みつまたの栽培をより盛んなものにしたのです。